



私のイギリス体験から

高橋央宜
化学系講師

平成10年11月から10か月間、文部省在外研究員としてロンドンに生活する機会を得ました。本稿は、筆者の体験をもとに書いたものです。イギリスに初めて行かれる方の御参考にでもなれば幸いです。

悲劇の始まり

私がロンドンに降り立ったのは日曜日でした。これが最初の悲劇の原因でした。先方の先生からの指示通り、ヒースロー空港から地下鉄を乗り継いで Blackfriars という駅までやってきました。小さいながら、ロンドンのターミナル駅の1つです。ここから British Rail (日本のJRみたいなもの) に乗り換えて、とりあえずの宿泊先である大学の学生寮まで行くはずだったのですが、どうも様子がおかしいのです。実は、日曜日はこの駅から出る電車はないのです。通り掛かりのおばさんに聞いたとき、そのようなことを答え

てくれたのですが、私はにわかには信じませんでした。(ここは仮にもロンドンのターミナル駅。そんな馬鹿な筈がない。この人もあまり詳しくないんじゃないのか。) 駅構内に貼られた時刻表を調べ、その恐ろしい事実を納得するまでにはある程度の時間を要しました。結局 Victoria という大きな駅まで戻り、そこから電車を乗り継いで行っただけですが、本当の悲劇はそれからでした。

冬の日は短い

ロンドンでは日本よりも緯度が高く、冬の日照時間はかなり短くなります。そしてあいにくなことに、日本からロンドンのヒースロー空港へ行く便のほとんどは、夕方に着着するのです。私はこのことを踏まえ、ロンドンに最も早く(午後2時頃)到着する便を選びました。しかし、目的の Denmark Hill の駅に着いた時には既に真っ暗。そのため、通りの名前

の表示に気付かず、見知らぬ地を2時間位さまようことになったのです(重くかさばる荷物とともに)。何度も道を尋ねました。みな親切でしたが、大学の寮のことなど、あまり知っている人はいませんでした。とにもかくにも寮にたどり着きましたが、その日の夕食は、自販機からのジュースとスナックしか選択肢がありませんでした。ロンドンに初めて行くのが冬の場合は注意して下さい。

London A-Z Map

ロンドンで暮らしていくには、この「エイ・トゥー・ゼッド」が必需品です。長いこと住んでいる人でさえ、これなしではやっていけません。私が研究室に初めて行ったその日、教授の先生からまず言われたことの1つもこのA-Zを買うことで、昼食の帰りに早速買いました。ロンドンでは、すべての通りに名前が付いており、各建物あるいは各戸には必ず固有の番号が表示されています。ですから、A-Zさえあれば、ほぼ確実に目的地にたどり着くことができるのです。

日曜日とクリスマスは要注意

最初にも触れましたが、日曜日の列車ダイヤは平日とは大幅に異なります。地下鉄、British Railとも、始発は2時間位

遅くなります(早く起きて遠出することかなわず)。British Railでは、列車の本数が極端に減ったり、区間によっては1本も走らなくなります。研究室のスコットランド人学生に尋ねたところ、これは宗教的な理由によるのだらうと言っていました(その学生は、日曜日はいつも昼頃まで寝ているそうですが)。ロンドンとスコットランド各地を結ぶ寝台列車がありますが、土曜の晩は運行されていません。

もっとすごいのがクリスマスの日(12月25日)です。さぞかし賑やかなのだらうと思うと、これが全く正反対。地下鉄、British Railは1本も走らないという徹底ぶり。バスの本数も激減。家主一家のディナーに招かれ外出はしませんでした。静まりかえった街の様子は容易に想像できます。

うれしい春の訪れ

3月に入ると、日照時間が急速に長くなっていくのを感じました。これに拍車を掛けるのが、3月終わりから始まるサマータイムです。昼間の時間は一気に1時間長くなり、人々は活気づいていくのです。サマータイムが始まるのは、正確には3月の最終日曜です。現地の人達にとっては当たり前なのか、これといった予告は何もありませんでしたが、私はいつ

から始まるのかわかりませんでした（予習不足？）。

地下鉄諸事情

ロンドンと言えば、地下鉄の生まれたところでもあります。かまぼこ型の、かなり小さい車体の電車が走り回っています。地下鉄を表す英語は世界的には subway になっているのに、本家本元では Underground です（日常会話では tube もよく使う）。私が使っていた Northan line には恐ろしく古い電車が走っていましたが、滞在中に消滅してしまいました。この電車は、実は車掌のいる最後の地下鉄電車でした。この車掌さんたち、ドアを閉めるときに「Mind the doors !」という有名なセリフを大声で言うのですが、ある日本人が「満員だぞー」と聞こえ、ぎくつとしたそうです。そう思って聞くと、確かにそうも聞こえました。この古い電車の置き換えも、私が帰国した頃までに完了したはずですが。ロンドン名物が1つ消えました。

地下鉄は地元の人にとっても旅行者にとっても欠かせない足なのですが、その信頼性のなさには相当なものがあります。駅が突然閉鎖になることは珍しくありません。原因はよくわからないのですが、ホームにある非常用ボタンが押され

たというのが多いようです。しかもある新聞記事によれば、この非常用ボタンを押す人の大半は、車内に忘れ物をしたのが理由とか。駅が閉鎖中は、列車はその駅を平然と通過していきます（大抵は直前まで予告なしに）。大事な用の場合、相当の余裕を見しておく必要があります。

赤いダブルデッカー

ロンドン名物といえば、赤い二階建てのバス。ロンドン中をくまなく走っていますが、路線系統がかなり複雑なので、短期滞在者が使いこなすのはかなり難しいと思います。こちらも、車掌のいる古いタイプは数が減っています。この旧式バスは、出入口にドアがなく、飛び乗りや停留所以外での乗降が可能です。なかなか楽しいのですが、なくなるのも時間の問題でしょう。

「Request stop」と表示されているバス停から乗る時には手を挙げる必要があります（もっとも地元の人々のやり方は、手を挙げるというより90度の角度でさえぎるといった感じですが）。これは非常に重要なことで、例え運転手と目が合っても、手を挙げていなければ無情に通過して行ってしまいます。他に客がいるからといって安心しないで下さい。同じバスに乗るとは限りませんから。

赤信号，1人でも渡ろう

ロンドンでは，歩行者は安全が確認できれば（もっと正確には，危険がないと勝手に判断すれば），赤信号でもどンドン渡ります。大胆かつ迅速に渡ります。これが自然にできるようになると，ロンドン生活にもかなり慣れたと言えます。警官でも渡ると聞いていましたが，私も日撃しました。前の人々が渡ったからといって，のこのこ後をついて行ってはいけません。私も何度か危ない目に会いました。赤信号に変わる直前の横断も非常に危険です。車が横から突進してきます。

地名は難しい

ロンドン中心部に Leicester Square（レスター・スクエア）という有名なところがあります。私は毎朝，駅の放送が「レイセスター」と言っているのか「ライセスター」と言っているのか，一生懸命聞き分けようとしていました。その北に，Tottenham Court Road（トッテナム・コート・ロード）という駅があります。極めつけは，少し南の方にある Clapham（クラップナム）でしょうか。この辺りは，夏目漱石や，有名な化学者であるケクレが住んでいたところ（ある訳本に「クレイファム」と書いてありました）。ロンドンの西方に Reading（レディング）とい

う都市があり，誰もが最初は読み間違えると思われます。

パブは楽し

イギリスの pub は，一種独特の社交空間です。研究室でも，毎週金曜日，夕方のセミナーのあとに行っていました。pub では，ただひたすらビールを飲みます（ランチタイムは別ですが）。食べるとすれば，小さい袋に入った各種ポテトチップス（イギリスでは crisps という。chips は，あのフィッシュ・アンド・チップスのチップス）だけでした。ビールは，何の洒落っ気もない 1 パイントグラス（真ん中に 1 2 pint の秤線が入っている。1 pint は約 500 ml）に，サーバーからあふれんばかりに注がれます（というか，あふれている）。混んでいるときは立ったまま，みな熱い会話を交わすのです。

帰国して約 1 年，本稿を書きながら改めて思い出にふけてしまいました。なおこのコーナーの性格上，研究の専門的な話は避けましたが，そちらの方でも十分な収穫を得ましたので，念のため申し添えておきます。

（たかはしおうぎ 量子化学専攻）